

山口ゆめ回廊博覧会『ゆめはくアート巡回プロジェクト』

地域の文化や音楽を研究する大石始が、圏域に伝わる祭や唄について地元の方々に公開インタビュー。

津和野町編

会場：12月18日(土) 藩校 養老館／津和野町

ゲスト：山岡浩二氏(津和野踊り保存会会長・郷土史家)

山陰の小京都に息づく覆面の踊り——津和野踊り

文／大石始

この列島には覆面の踊りが存在する。それも数え切れないほど数多くの。それを言うなら獅子舞など頭をかぶって舞う民俗芸能はいくらだってあるわけだが、ここで言う踊りとは、夏の盆踊りのことを指す。

たとえば、秋田県の羽後町に伝わる西馬音内盆踊り。日本三大盆踊りののひとつに数えられるこの盆踊りでは、彦三頭巾という黒い頭巾をすっぽり被ることになっていて、目元だけが開いたその頭巾はイスラムの女性用ヴェール「ブルカ」を思わせる。かがり火に彦三頭巾が照らし出されるその光景には一種異様な迫力があり、この盆踊りは亡者踊りとも呼ばれている。

白装束に黒頭巾をかぶる熊本県八代市の植柳盆踊りもなんともミステリアスだ。西馬音内盆踊りのように顔を覆い隠すわけではないけれど、お盆にあの世から戻ってくる精霊を彷彿とさせる。実際、植柳盆踊りももまた西馬音内盆踊りと同様に亡者踊りと呼ばれるのだという。

亡者踊りとは、すなわちゴーストダンスである。性別や年齢を超え、名前などあらゆる社会的属性を捨て去ったうえで、祖霊とともに踊り、霊を慰める。西馬音内盆踊りや植柳盆踊りといった覆面の踊りには、盆踊りの本質のひとつが示されている。

島根県南西の盆地に位置し、「山陰の小京都」とも呼ばれる島根県津和野町。この地に西馬音内盆踊りによく似た盆踊りが行われているということは以前から話に聞いていた。YouTubeにアップされた動画を観ると、黒と白でまとめられた衣装には風情があるし、古風でしっとりとした囃子と踊りには長年培ってきたものの厚みも感じさせる。一言でいえば、無性にそそられるものがあるのだ。

山陰の山中で行われている覆面の踊り、津和野踊に触れるため、津和野町に向かうことになった。

津和野町の中心部に繋がる坂道を車で進んでいく。自分たちは今、盆地の底に向かって突き進んでいるのだ。辿り着いた「底」には、それまで走り抜けてきた山の世界とは異なり、津和野城の城下町としての風情がはっきりと残っていた。時間が止まっているかのような空気が流れていて、「津和野にやってきたんだ」という感慨が込み上げてくる。

今回津和野踊について話を聞かせてくれたのは、津和野踊保存会会長を務める郷土史家の山岡浩二さんだ。山岡さんは昭和31年(1956年)、津和野町生まれ。母と祖母も津和野踊の指導者を務め、物心つく前から踊りに触れてきたという津和野踊のマスターのひとりである。

「津和野踊の初日は8月10日、新町通りという場所で行われるんですが、それこそ私の家のすぐ近くで踊っていたんですよ。ちょっとかっこいいことを言えば、『蚊帳の中で囃子を聞いて育った』という感じなのかなと思います」

山岡さんが幼少時代を送った昭和30年代は、言うまでもなく高度経済成長期の真っ只中にあたる。時代の変化の波が日本中を飲み込み、この時期、各地の伝統的風習の多くが途絶えてしまったわけだが、山岡さんは当時のことをこう回想する。

「津和野踊自体は当時も今もまったく変わっていないんですが、踊っている人数はやはり昔のほうが多かったですね。僕が生まれたころからここ（津和野）でもだんだん過疎が進み、人口が減ってしまいましたから。ただ、昭和40年代に入ると今度は観光客が増えてくるんですよ。今でも一年間で100万人近くの方が来てくれますが、一時は150万人観光客が来てくれた年もありました」

あくまでも自分たちのための踊りであった津和野踊は、このころから観光客という外部を意識せざるを得なくなった。そうしたスタンスは、後述する現在の取り組みにもはっきりと表れている。

ただし、山岡さんが言うように、津和野踊のスタイルそのものは今も昔もほとんど変わらない。そのことはかつての踊りの風景を撮影した写真からも明らかだ。特徴的な頭巾などは現在のもものと変わらないし、カラー写真に加工すれば現在のもものとほとんど見分けがつかないだろう。ひとつ現在と違うのは、写真のなかにちらほら仮装姿の踊り手が写り込んでいることぐらいだろうか。

「昔は今以上にいろんな格好をしていましたし、仮装する方も多かったんです。侍の格好をしてみたり、多かったのが男性が女装するパターン。あとはテレビの流行りものですよ。年によっては仮装大会をやったこともあるんですよ」

実は現在も津和野踊保存会は仮装を推奨している。「山陰の小京都」の盆踊りということのでっきり厳格なルールに則っているのかと思いきや、山岡さんは「盆踊りですので何を着てもいいですよ」と話す。

「正装を着ないと踊っちゃいけないと思われるのが実は嫌で。そうするとね、格式ばって盆踊りらしくなくなるじゃないですか。（伝統が）守られるかもしれないけれども、それは本当の盆踊りではないと思うんですよ、やっぱり」

津和野踊の起源にもいくつかの説がある。そもそも民衆の間で広まり、定着した風習というのはルーツがはっきりしていないことが多いが、津和野踊も例外ではない。

津和野踊が初めて踊られたとされているのが元和3年（1617年）。現在の鳥取県にあたる因幡国の鹿野城主だった亀井茲矩は、そのとき攻めあぐねていた金剛城の城主が歌舞音曲が好きだということを知りつけると、ひとつの作戦を思いついた。盆踊りの夜、自軍の兵士を仮装させ、踊りの輪の中に紛れ込ませ、一気に攻め込もうというのだ。鎧兜をカモフラージュするためにブカブカの着物を着用し、顔がわからないよう頭巾をかぶらせると、作戦通り、一瞬の隙を見て金剛城を落としたのだという。

茲矩は慶長17年（1612年）に死去しているが、息子である政矩が津和野に入り、亀井家としては初代の津和野藩藩主となる。そしてその際、金剛城を落城させた夜に踊った鹿野の盆踊りを津和野に持ってきたとされているのだ。それが元和3年、津和野踊が始まった年といわれている。

「ただ、400年以上も続いている盆踊りとなると、必ずしも1本の筋道というわけではないと思うんですよ」——山岡さんはそう話す。

「亀井氏がやってくるまで津和野で何の踊りもなかったのかというと、そのほうが無理があるような気がしますよね。人が住んでいる以上は、何がしかの念仏とか、盆行事に絡む踊りがあったと思うんですよ。だから、もし鹿野から何かが入って来たのだとすれば、もともとあった踊りの要素と習合しながら今の形になっていったのかなと思いますね」

山岡さんは「伝来四〇〇年を迎えた津和野の宝 津和野踊」（「季刊文化財」所収）という論考のなかで、鹿野ルーツ説に疑問を呈しながら、亀井氏がやってくる以前から津和野川流域では「ヨイヤナ」という踊りが踊られていたことを指摘している。

では、津和野川流域で踊られていた「ヨイヤナ」とはどんな踊りだったのだろうか。現在では想像を膨らませるしかないが、伊勢音頭の囃子詞にも「ヨイヤナ」という言葉があるし、四国～九州では「ヨイヤナ節」という民謡も伝えられている。そういえば、冒頭で触れた西馬音内盆踊りにも「ヤートーセヨーイワナーセッチャ」という掛け声が入るし、いろいろと妄想が膨らむ話ではある。

津和野踊の魅力のひとつが、しっとりとした囃子だ。演奏者は地方（じかた）と呼ばれ、三味線と横笛、大太鼓で構成される。上品で気品漂う演奏は、どこことなく「おわら風の盆」（富山県富山市八尾地区）も連想させる。

「三味線や笛まで入っている盆踊りはこのあたりでは珍しいかもしれないですね。歌自慢や笛の上手なおじいちゃんも昔からいますけど、農村部になると三味線を弾ける方はほとんどいない。三味線を弾け

る方というのはやっぱり芸者さんなので、そういう人がいる場所というのは、ある程度都市化したところになってくるんですね。津和野でも僕が子供のころは芸者さんが（三味線を）やっていました。あるいは芸者さんに習った町の奥さん方。こんな田舎でもお城がある城下町というのは藩における首都ですから、やっぱり遊郭を含むあらゆる文化があったんです」

津和野踊は歌詞もおもしろい。一部を抜き出してみよう。

松の葉越しに 出る月みれば
見えつ隠れつ 人目をしのぶ ササヤーレコナーサ
空にも恋路が あるものか ヨーイヤナー

富士や浅間の 煙はおろか
衛士の焚く火は 沢辺の蛍 ササヤーレコナーサ
焼くや藻塩の 身をこがす ヨーイヤナー

さても見事や 御手洗つつじ
宵につぼんで 夜半に開く ササヤーレコナーサ
夜明け方には ちりぢりと ヨーイヤナー

山岡さんはこの歌詞のポイントをこのように解説する。

「ご覧のように、ほぼ恋の歌なんですね。2番になると、恋に身を焼く乙女心みたいなことが出てきます。火山、火、蛍と燃えるものが続き、最後に『（恋で）身をこがす』と落とす。おもしろいですよね。3番になると、これはもう恋というより性愛です。『さても見事や 御手洗つつじ』の意味がよくわからないんですけど、『宵につぼんで 夜半に開く』になるともはやエロティックですらあります」

津和野踊自体は、もともと祖霊を供養するための念仏踊りがルーツにある。だが、歌詞には性愛などさまざまな要素が組み込まれている。盆踊り自体、そうした二重性が見られるものが多いが、津和野踊の言葉は表現そのものが実に洒落ている。あらゆる文化が流れ込んできた津和野の地の文化的な豊かさが、こんなところからも浮かび上がってくるのだ。

なお、津和野生まれの森鷗外は自伝的小説『キタ・セクスアリス』のなかで故郷の盆踊りについて描写している。具体的に名前を出していないものの、「踊るものは、表向は町のものばかりというのであるが、皆頭巾で顔を隠して踊るのであるから、侍の子が沢山踊りに行く」という表現があることから、津和野踊であると言われている。

ただし、鷗外は盆踊りを幼少時代の美しい記憶として綴っているわけではない。男たちの卑猥な会話を耳にして、「僕は穢い物に障ったような心持がして、踊を見るのを止めて、内へ帰った」と嫌悪感を露わにするのである（これは『キタ・セクスアリス』という小説が、主人公の性欲史をテーマにしていることに由来する描写でもある）。

かつての盆踊りとは、男女の出会いの場であり、奔放な性のエネルギーを発散する場所でもあった。そのため、明治に入ると盆踊りは猥雑で鄙俗な悪習として全国的に規制の対象となった。

鷗外が津和野を離れるのは明治5年（1872年）、10歳のときだが、津和野踊に触れていたのは踊りがかつての猥雑さを残していた最後の時代だったのかもしれない。津和野踊の歌詞にはそんな時代の痕跡が残っているわけだ。

津和野踊といえば、ほぼ覆面と言っていい頭巾である。冒頭で書いたように西馬音内盆踊りの頭巾は彦三頭巾と呼ぶが、津和野踊では「御高祖（おこそ）頭巾」という。この呼び名は津和野踊固有のものではなく、江戸時代中期から大正時代にかけて女性のあいだで広く被られた防寒用の頭巾も御高祖頭巾と呼ぶ。江戸時代は現在以上にさまざまな頭巾のヴァリエーションがあり、それが盆踊りに持ち込まれたのだろう。盆踊りの輪の中で性別や年齢を超え、祖霊と共に踊るためには、顔をすっぽり隠すことができる頭巾は便利なツールでもあったはずだ。

ちなみに、津和野踊と西馬音内盆踊りというふたつの「覆面の踊り」には、実は繋がりがあった可能性があるのだという。山岡さんはこう言う。

「黒い頭巾が似ているだけじゃないかと言われることもあるんですが、実はそうとも言えないんです。西馬音内の横手城の城主は小野寺家だったんですが、関ヶ原で西軍について敗れるんですよ。そのあとどうなったかという、なんと亀井家の家来として津和野に来てるんです。今でも津和野に小野寺家は

続いているんですよ。

そういう関係からすると、ひょっとしたら西馬音内から津和野に伝わったものもあるのかもしれないですね。亀井家は小野寺家を大変大事にしていたようで、家老と同等の扱いをしたうえに、藩政に関する意見も求めたようです。小野寺家を慰めるために故郷の盆踊りを思わせるアレンジを施した可能性もゼロではないかもしれない」

山岡さんはそこまで話して、「これは実は僕の郷土史の師匠が唱えている仮説のひとつなんです」と付け加えた。あくまでも人から人へと伝わってきた盆踊りのルーツや成立のプロセスを追うのは、雲を掴むような話でもある。だが、もしもバトンを渡した踊り手のひとりに、津和野から遠く離れた西馬音内からやってきた人物がいたとしたら？——津和野踊にはそんなロマンが残されているのだ。

山岡さんはこうした話を、津和野踊の衣装を実際に着用し、実演を交えて解説してくださった。衣装には小さな鈴が付いているが、これは衣装の下の鎧兜の音をカモフラージュするためのものだったとされる一方で、薄暗い盆踊りの場でも相手が判別できるよう付けられたという説もあるらしい。頭巾の上には鉢巻を巻き、そこに団扇を挿す。下半身はシンプルなので、間近で見ると案外動きやすそうだ。

津和野踊は毎年8月10日、新町の観音堂前で踊り始めが行われ、12日から16日まで各町内で踊られる。15日には津和野のメインストリートである殿町で各町の踊り手が集結。クライマックスとなるこの日だけ生演奏が披露される。踊り手たちは約2時間、優雅な囃子に合わせて踊り続けるのだ。

踊り手の振りにはそれぞれ名前がついている。なかには合掌を思わせる「拝み手」もあつたりと、踊りをひとつひとつ解析していくと、確かに念仏踊りがベースにあることが見えてくる。

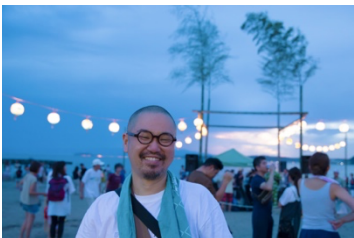
「踊り続けていると、本当に無我の境地にいけるんですよ。8月15日は夜といっても暑いですから、汗でビチョビチョになって踊り続ける。ちょっと要領をつけて言うと、『踊る坐禅』ですね、津和野踊りは。それこそ念仏踊りの境地だと思います」

踊る坐禅。おもしろい表現だ。踊り続けるうちに身体は熱を帯びていくのに対し、心は次第に鎮まっていって、疲れが飛んでいって、延々踊り続けられるような心境となる。山岡さんはその境地を「踊る坐禅」と説明するのだ。

2022年は森鷗外没後100年目の年にあたる。奇跡的なことに、津和野踊の衣装や踊りは『キタ・セクスアリス』が書かれた時代とほとんど変わらない。津和野踊当日は衣装も貸し出ししているそうだし、練習会も行われるのだという。その意味で津和野踊は、観光客に開かれた盆踊りでもある。踊りの輪の外から踊り手たちを写真に収めるのも悪くないが、自分自身が踊り手となることで、もう一步深く津和野の世界に足を踏み入れることもできるわけだ。

御高祖頭巾から見える津和野の景色はいったいどんなものなのだろうか。ひょっとしたら通りの向こうから鷗外の霊も覗き込んでいるかもしれない。

大石始（ライター）



国内外の地域文化・音楽を追うライター。旅と祭りの編集プロダクション「B.O.N」主宰。主な著書に『盆踊りの戦後史』（筑摩選書）、『奥東京人に会いに行く』（晶文社）、『ニッポンのマツリズム』（アルテスパブリッシング）、『ニッポン大音頭時代』（河出書房新社）ほか。

※本テキストの無断転載はご遠慮ください。